

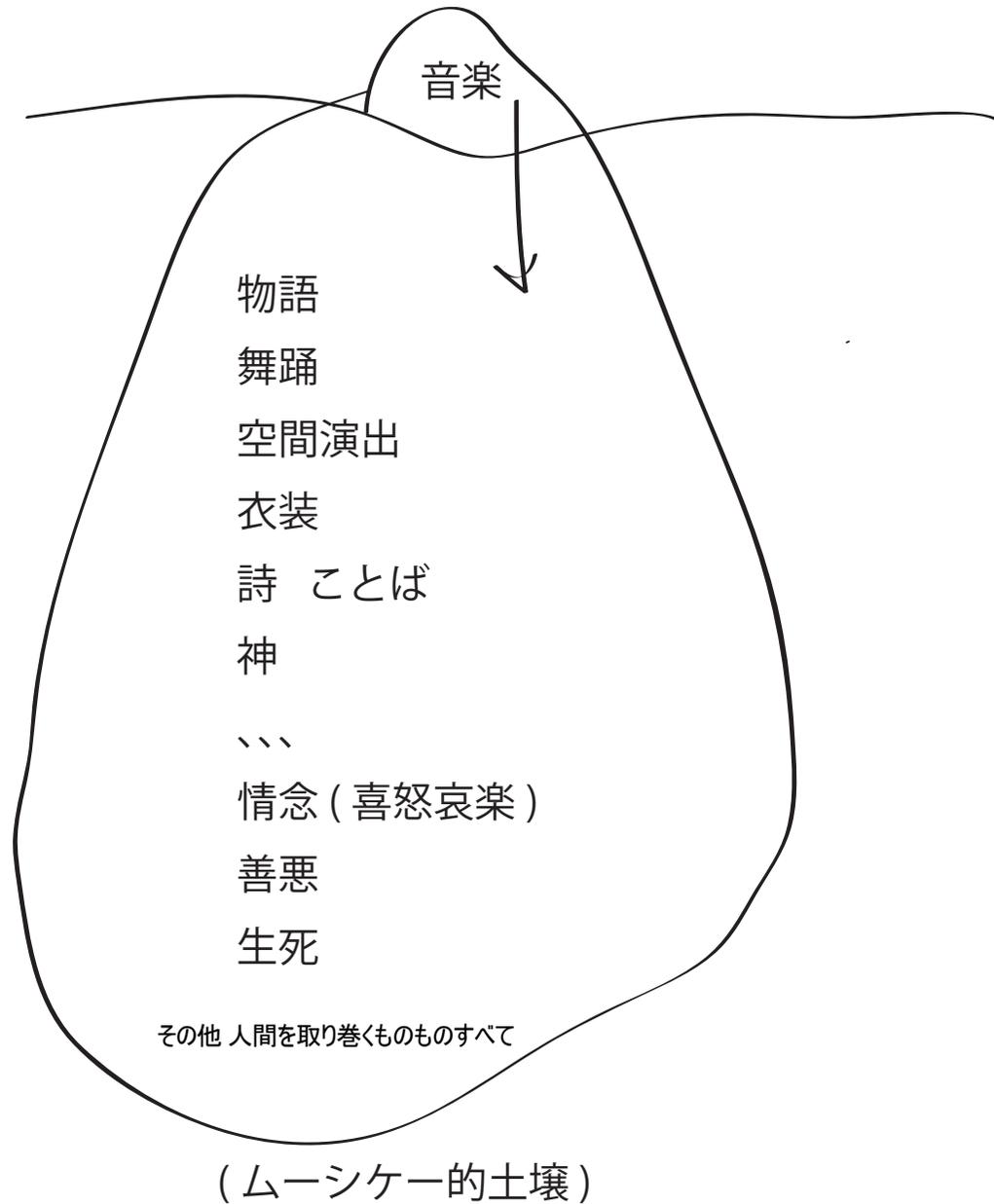
サウンドデザイン演習（女子美術大学）

【講義3】中世において音楽とはいかなるものであったか
～キリスト教、ミサ通常文とともに。単旋律から多旋律への試み

講義担当：石井 拓洋
takuyo.lshii@gmail.com

2019

氷山のイメージ



「君たちは、西洋藝術にたずさわる人なんだから、聖書ぐらい読まないかね」

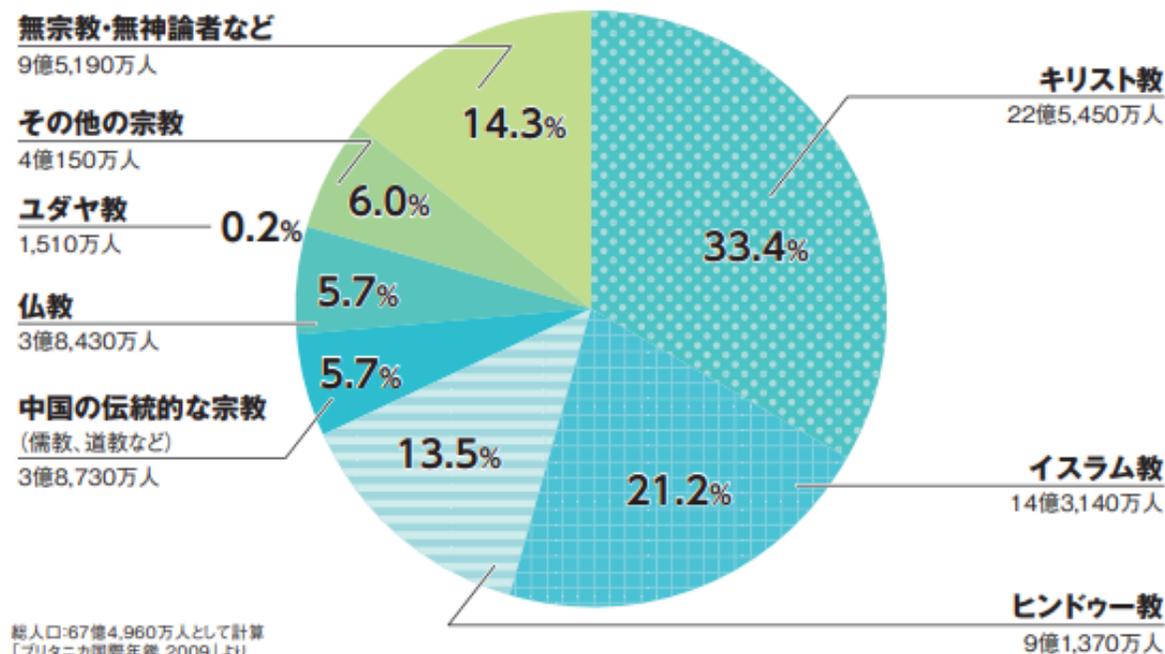
指揮者・佐藤巧太郎（かつての授業より）

世界の宗教を知ろう!

世界には、それぞれの地域に根ざした宗教が数多く存在します。
宗教ごとに慣習が異なり、価値観も様々であるということを知り、外国人旅行者をもてなす上でのヒントにしましょう。

各宗教の信者数とその割合

キリスト教、イスラム教、仏教の三大宗教が全体の60.3%を占めます。
また、宗教人口は仏教よりもヒンドゥー教の方が多いです。



『世界の宗教を知ろう!』 東京都港区 webページより (cited : 2018-7-14)

https://www.city.minato.tokyo.jp/citypromotion/welcome/documents/omotenaship74_85.pdf



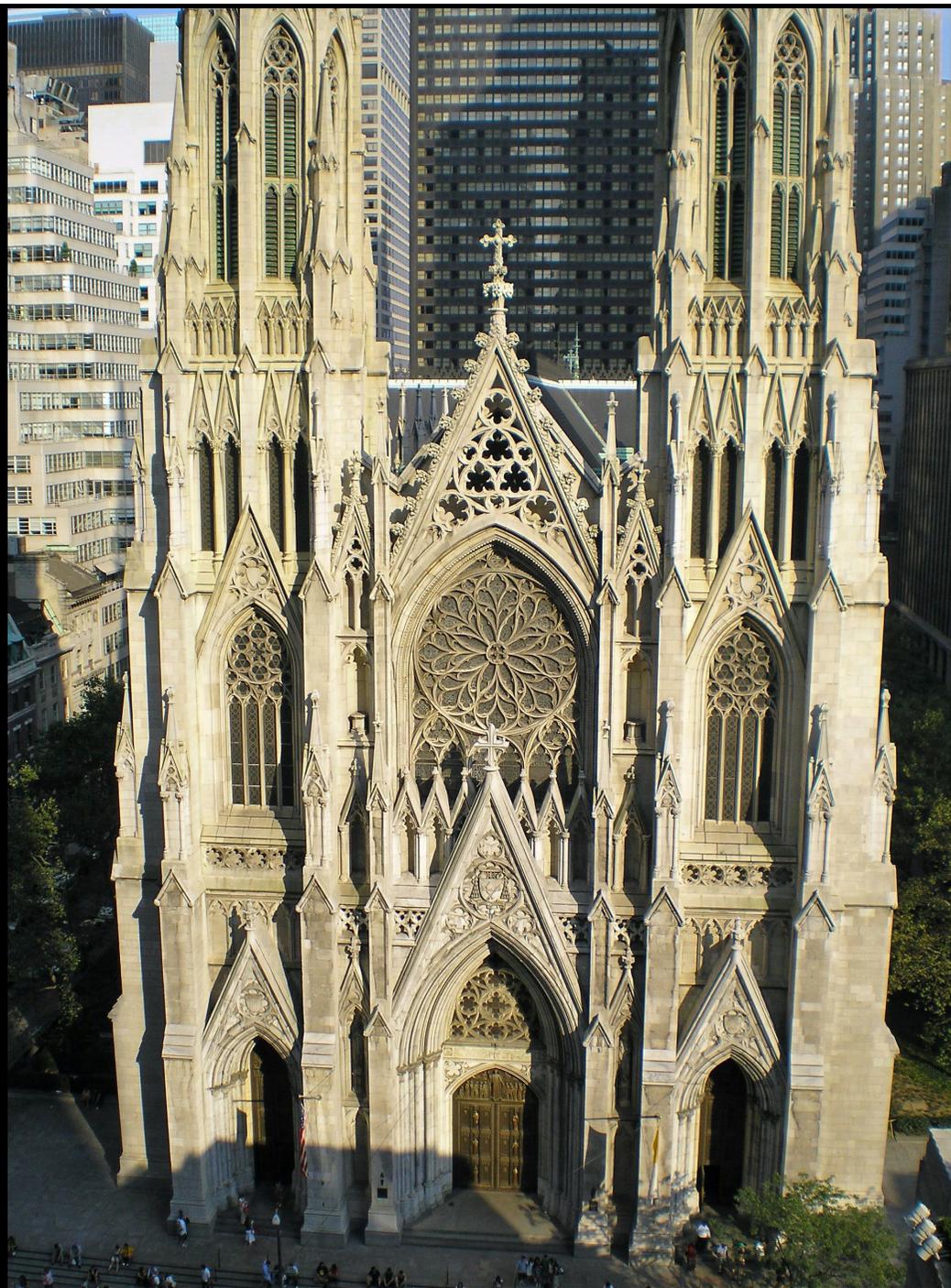
セント・パトリック大聖堂 (NYC 5番街)

画像: <http://www.boomsbeat.com/articles/1824/20140327/amazing-aerial-and-interior-photos-of-st-patricks-cathedral-in-new-york.htm>



セント・パトリック大聖堂 (NYC 5番街)

画像: <http://www.boomsbeat.com/articles/1824/20140327/amazing-aerial-and-interior-photos-of-st-patricks-cathedral-in-new-york.htm>



セント・パトリック大聖堂 (NYC 5番街)

画像: <http://www.boomsbeat.com/articles/1824/20140327/amazing-aerial-and-interior-photos-of-st-patricks-cathedral-in-new-york.htm>



セント・パトリック大聖堂 (NYC 5番街)

画像: <http://www.boomsbeat.com/articles/1824/20140327/amazing-aerial-and-interior-photos-of-st-patricks-cathedral-in-new-york.htm>



セント・パトリック大聖堂 (NYC 5番街, 2014) 改修期間 2012~2015
画像: T. Ishii



セント・パトリック大聖堂 (NYC 5番街) 2014
画像: T. Ishii



セント・パトリック大聖堂 (NYC) 2014
画像: T. Ishii



トリニティ教会 (NYC ウォール街)

画像: <http://www.occupyfaith.com/faith/episcopal-bishop-leads-ows-protestors-church-barricades>



トリニティ教会 (NYC ウォール街) 2014
画像: パブリックドメイン (wikipedia)



ニューヨーク証券取引所（トリニティ教会付近、NYC ウォール街）2014
画像：T. Ishii



トリニティ教会 (NYC ウォール街) 2014
画像: T. Ishii



“Trinity Church” (絵 : Augusta Payne Rathbone)

画像 : <https://www.annexgalleries.com/inventory/detail/AR482/Augusta-Payne-Rathbone/Trinity-Church-New-York>



トリニティ教会 (NYC ウォール街)

画像: <http://baldpunk.com/wp-content/uploads/2009/09/Trinity-Church03Wall-St.JPG>



「この経済の街に時々こうして宗教が存在を主張しているところに、
ニューヨークの成り立ちの面白さがある」

亀井俊介『ニューヨーク』岩波新書、2002年、36ページ(英文学者)。

トリニティ教会 (NYC ウォール街)

画像: <http://baldpunk.com/wp-content/uploads/2009/09/Trinity-Church03Wall-St.JPG>

1 「中世の音楽」の時代

「キリスト教は歌う宗教である」

金澤正剛 『キリスト教と音楽:ヨーロッパ音楽の源流をたずねて』、2007年、16頁。

1 「中世の音楽」の時代

「ヨーロッパ音楽の歴史を語るときに、どうしても無視するわけにはいかないのが、キリスト教との関係です」

[金澤 2007:1]

「音楽にかぎらず、他の芸術や文学についてもいえることですが、ヨーロッパ文化を支える基盤としてキリスト教がはたした役割はいくら強調しても強調しすぎることはない」と断言してよいほど大切なものだったのです」

[金澤 2007: 1-2]

1 「中世の音楽」の時代

- 中世とは

→ 西ローマ帝国の滅亡(→古代の終わり/467年)
～東ローマ帝国の滅亡(1453/近世のはじまり)

(この時代)

- 392年 ローマ帝国でキリスト教が国教化
- 音楽は**キリスト教の典礼**のもとで大きく発展した
- **単旋律の音楽**は、キリスト教のもとで発展した
- **単旋律から多旋律**へと約1000年かけて発展した

1. 単旋律の音楽の起源

グレゴリオ聖歌

- 西洋音楽の基礎といえるのが「グレゴリオ聖歌」(6c頃～編纂)



試聴《天よ、上より雫をしたたらせよ》(待降節 第4主日のミサのイントロイトゥス)

CD: “Gregorian Chant” Pater Hubert Dopf SJ, Choralschola Der Wiener Hofburgkapelle

- ローマ教皇グレゴリウス1世 (590-604在位)が中心となって編纂された(といわれる)聖歌
- グレゴリオ聖歌はローマ・カトリック教会のミサ等の典礼で用いられた「単旋律／無伴奏」の音楽。

1. 単旋律の音楽の起源

グレゴリオ聖歌

- ミサ mass (英)
 - ミサという土壌で、中世の音楽は〈単旋律から多旋律へ〉と発展した。
 - ミサとは、カトリック教会における典礼の1つ。その呼び名。
 - イエスの肉と血の象徴であるパン (聖体, ホステア) と葡萄酒を拝領する儀式
 - この儀式起源は、イエスが十字架にかかる前日の「最後の晩餐」
 - イエスと食事を共にして、いつも共にあることを確認する儀式。

「 イエスはパンを取り、賛美の祈りを唱えて、それを裂き、弟子たちに与えながら言われた。『取って食べなさい。これは私の体である。』 また、杯を取り、感謝の祈りを唱え、彼らに渡して言われた。『皆、この杯から飲みなさい。これは、罪が赦されるように、多くの人のために流される私の血、契約の血である。』 」

マタイによる福音書 26章-26,27,28

十二使徒の名前は
マタイによる福音書 10:1 より



バルトロマイ

アルファイの子ヤコブ

アムデレ
呼ばれるシモンの兄弟

イスカリオテのユダ

ペトロと呼ばれるシモン

使徒ヨハネ
(ゼベダイの子ヤコブの兄弟)

ゼベダイの子ヨハネ
福音記者ヨハネ

トマス

ゼベダイの子ヤコブ

フィリポ

徴税人のマタイ
福音記者マタイ

タダイ

熱心党のシモン

L'Ultima Cena 最後の晩餐 (1495-1498)
サンタ・マリア・デッレ・グラツィエ教会 (Milan・Italia)

1. 単旋律の音楽の起源

- ・ ミサ = イエスと食事を共にして、いつも共にいることを確認する儀式。

1.【開祭の儀】

主な聖歌：『あわれみの賛歌』（キリエ・エレイソン／ギリシャ語）

2.【ことばの典礼】（聖書朗読と司祭（神父）の説教の部分）

主な聖歌：『アレルヤ唱』

3.【感謝の典礼】（聖体〔パン, ホステア〕が用意される部分）

主な聖歌：『感謝の賛歌』（サンクトゥス、ベネディクトス）

4.【交わりの儀】（聖体拝領の部分。メインの部分）

主な聖歌：『平和の賛歌』（アニュス・デイ）

5.【閉祭の儀】

1. 単旋律の音楽の起源

- ・ミサ通常文 = 典礼の中で決められた、毎回、常に同じ言葉で唱える典礼文
- ・「ミサ通常文」の中には、聖歌の歌詞として、会衆が唱うものもある。
(覚えておきたい例) ↓

“Kyrie, eleison.
(キリエ, エレイソン)

Christe, eleison. “
(キリステ, エレイソン)

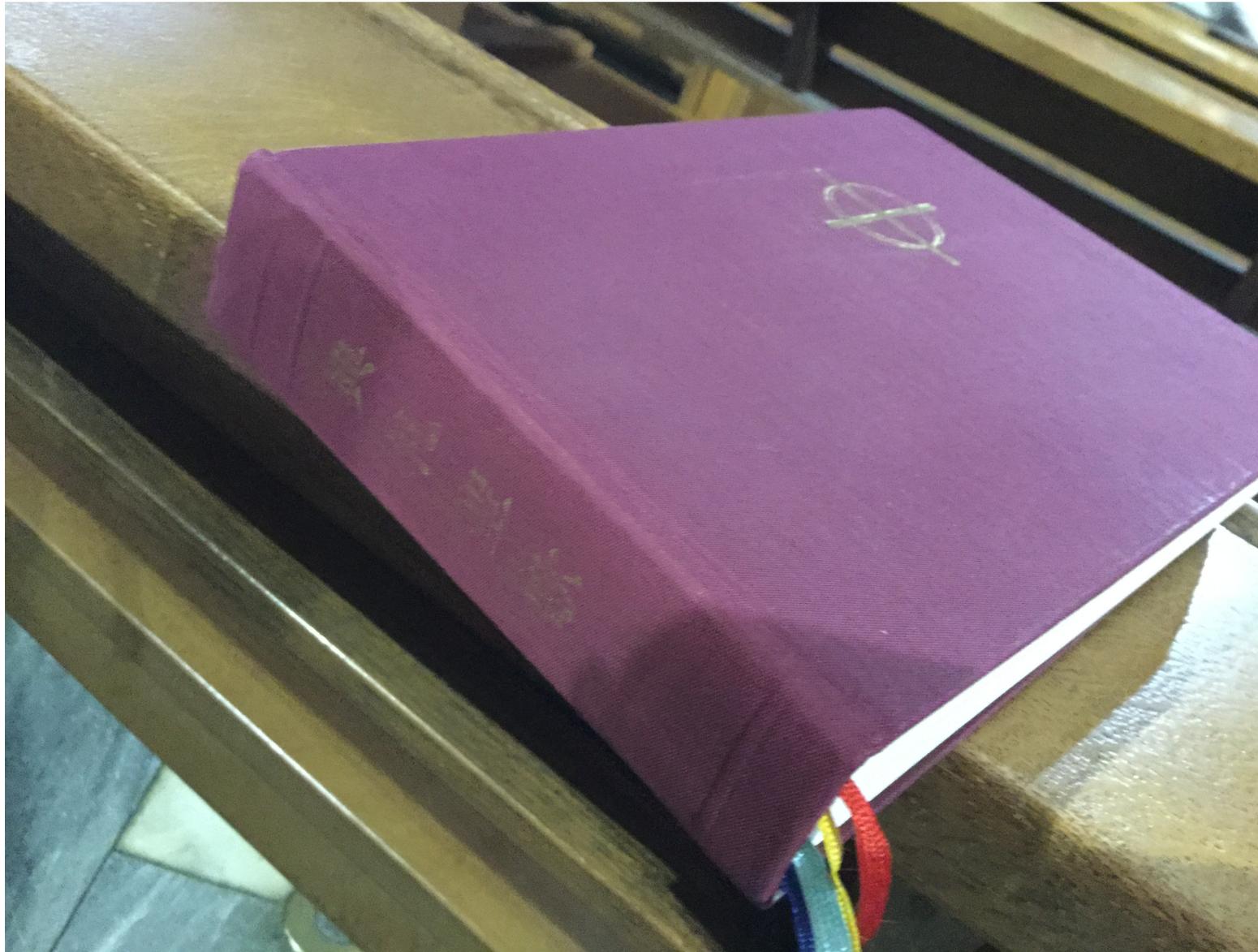


「主よ、あわれみ給え。 キリスト、あわれみ給え。」

“Kyrie, eleison” (ギリシャ語) = 「主よ、こっちむいてください」

※この歌詞(“キリエ, エレイソン”)で多くの名曲が作曲されている。

例: バッハ 《口短調ミサ》(1724)



ミサの参加者には、上のような「典礼聖歌集」の楽譜が渡される。
合唱隊の歌声とともに、参加者もまた楽譜をみて聖歌を歌う。

@ カトリック東京カテドラル関口教会 (2019) 撮影: T.ishii

あわれみの賛歌

主よ あわれみたまえ 主よ あわれみたまえ キリストあわれみたまえ

キリストあわれみたまえ 主よ あわれみたまえ 主よ あわれみたまえ

主よ あわれみたまえ 主よ あわれみたまえ キリストあわれみたまえ

キリストあわれみたまえ 主よ あわれみたまえ 主よ あわれみたまえ

典礼聖歌集 第203番 「あわれみの賛歌」 (日本語版 キリエ, エレイツンの一つ)

@ カトリック東京カテドラル関口教会 (2019) 撮影: T.ishii





「サンピエトロ大聖堂」(ヴァチカン)での「ミサ」で歌われる「キリエ・エレイツソン」(映像 3:00程度)



「サンピエトロ大聖堂」(ヴァチカン)での「ミサ」より、「感謝の典礼」と「交わりの儀」の部分。
先代のローマ教皇 ヴェネデクト 16世による。(4分程度)

7 単旋律から複旋律への歴史

- 中世の音楽の挑戦とは、グレゴリオ聖歌の単旋律(定旋律)に対して、「どのように別パート(対旋律)を追加するか」にあった。
- **オルガヌム： 定旋律を元に「対旋律」を作る技法。**
- 平行オルガヌム：定旋律の下部に平行して動く対旋律を作る。
→ 初期のオルガヌムであり、**5度や4度の音程**で平行に動かす。

8 アルス・アンティークワ

13世紀のフランスでの、自由オルガヌムによる音楽。
ノートルダム楽派のペロタン、レオナンが有名
グレゴリオ聖歌に対して、自由に動く対旋律を付けられる
ようになった。5度の完全協和音の響きが特徴。
リズムで特徴的な3拍子はキリスト教でも最重要の教義である
「三位一体」を表すという。

- 代表的な作曲家（ノートルダム楽派・フランス）
ペロティヌス（ペロタン）（1100頃～1200頃, 仏）
レオニヌス（レオナン）（1100頃～1200頃, 仏）



《Sederunt principes》 CD: “Léonin & Pérotin: Sacred Music from Notre-Dame”より



《Clausulae & motet on _Dominus-II》CD: “Léonin & Pérotin: Sacred Music from Notre-Dame”より

9 多声音楽

- ・多声音楽：自由オルガヌムにより作られた、
3声4声(3パート、4パート)からなる音楽。
- ・アルス・ノヴァ
→14Cのフランスにおける、多声音楽。リズムがより充実した。
作曲家・ギヨーム・ド・マショー (1300頃 - 1377, 仏)



《Kyrie Eleison》

CD: “Guillaume de Machaut: Messe de Nostre Dame”より

- ・イギリスの多声音楽
→ 3度・6度の音程 (ド音に対するミ音の音程)の多用。
作曲家・ダンスタブル (1390 - 1453, 英)
→ ルネサンス音楽への準備



《Kyrie, JD 1》

CD:” Dunstable: Sweet Harmony - Masses and Motets”より

10 ルネサンス音楽

- ・西洋での15C～16C頃までの音楽を指す（日本は室町時代）
- ・作曲家パレストリーナ (1525-1594, 伊) ローマで活躍。
パレストリーナ様式を完成（無伴奏対位法的合唱）。
単旋律から多旋律の発展が一段落つく。
ローマ楽派の代表的存在。教会音楽の理想型。 16世紀。



《Missa Brevis - Kyrie》 CD “Missa Brevis”より



《E Dal Letto Di Mille E Mille Colpe》 CD “Palestrina: Priego alla Beata Vergine”より

ただし、音楽における「ルネサンス音楽」とは、「ルネサンス期の音楽」の意味。
古代ギリシャの理念を復興させるという意識をもつ動向ではない。宗教曲が主要な存在。

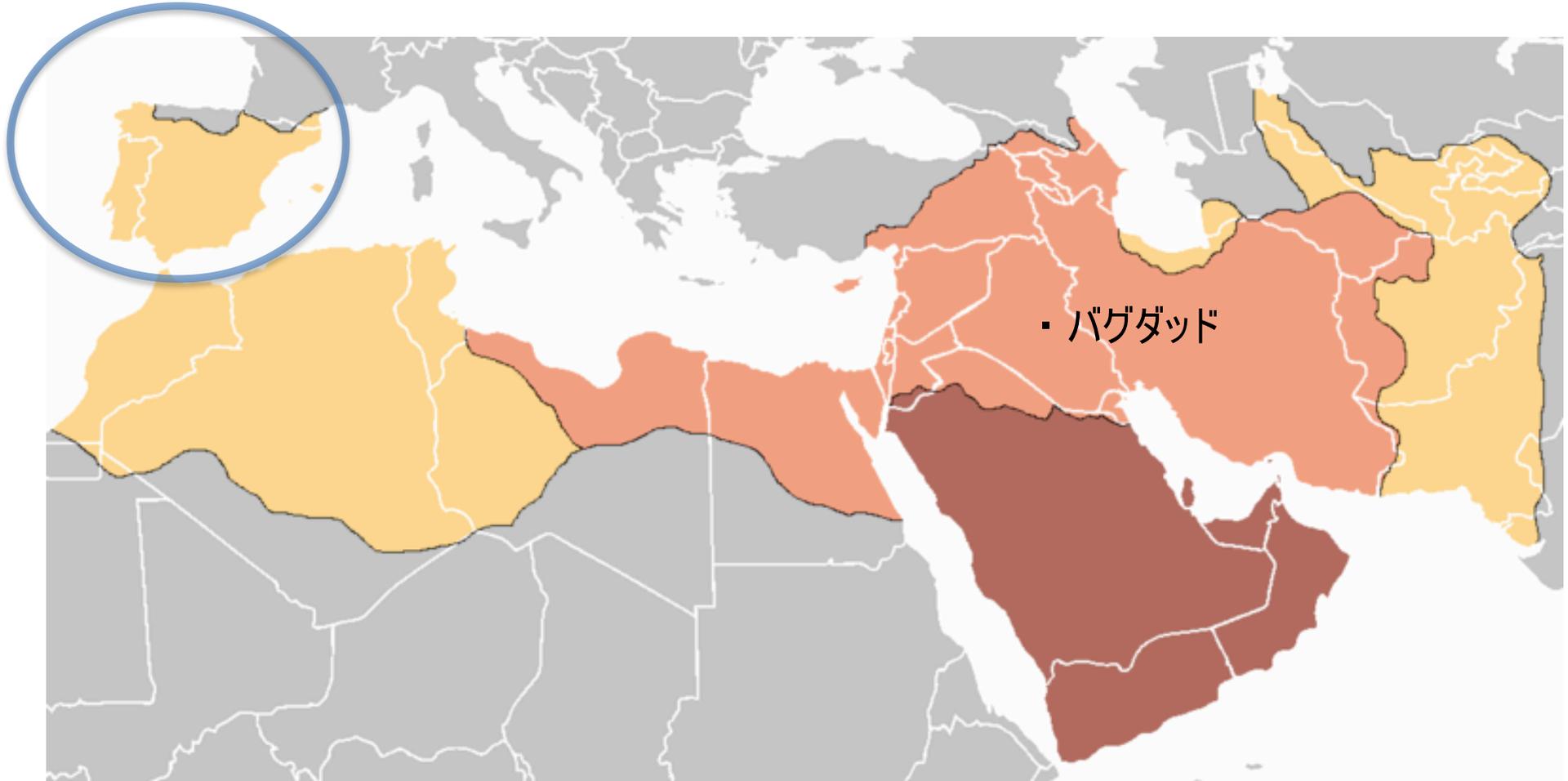
「ルネサンス」の経緯

「ルネサンス」の経緯

- ・ 4世紀「ゲルマン民族の大移動」で西ローマ帝国が滅んだ。
その際、混乱した者たちや、その後東ローマ帝国 (東方正教会) で異教徒とされた者たちが、さらに東方へ移動した。
- ・ そして、彼らは イスラム教圏 に辿り着き定住する。
- ・ 彼らの末裔によって、7C イスラム帝国アッバース朝の首都バグダッドを中心に古代ギリシャの知恵が保存、継承される。
- ・ イスラム帝国 の勢力が拡大する。
- ・ 8C頃、スペイン付近 (イベリア半島全土) が イスラム帝国 が占領。
つまり、キリスト教圏のスペインが イスラム教圏 となった。

「ルネサンス」の経緯

イスラム教化したスペイン



8世紀頃の「イスラム帝国」の勢力図（イベリア半島がイスラム化している）
<http://ja.wikipedia.org/wiki/イスラム帝国>

「ルネサンス」の経緯

- 西欧のキリスト教圏の人々は、スペインのイスラム化を看過しなかった。
- 「国土回復運動」(レコンキスタ) 8C~1492年(15C)
キリスト教徒による、イベリア半島奪回運動。
- 1492年「グラナダ解放」で、半島を再びにキリスト教圏とした。
- その際、敗走するイスラム教徒は、自分たちが保存していた文献を捨てた。
- その文献には 古代ギリシャの知恵が記されていた。
- その文献を拾った中世ヨーロッパの人々は
この時、古代ギリシャの知恵をはじめて知った。
(ユークリッド、アルキメデス、アリストテレス、プラトンなどの知恵)

「ルネサンス」の経緯

- イスラム教徒がもっていた文献は、アラビア語、ギリシャ語。
- 12Cのヨーロッパの人々は、ギリシャの叡智を知るために、
アラビア語 → ラテン語の翻訳をはじめめる。
- 原典はギリシャ語であったことを知り、
ギリシャ語 → ラテン語の翻訳をはじめめる。

「ルネサンス」の経緯

- 古典を知るための翻訳作業が、12世紀に「大学」を作り、ヨーロッパでの学問がスタートする。
パリ大学(1150年頃), オクスフォード大学(1100年頃)
- 西欧で最初に創立された大学 = ボローニャ大学(1088年頃)

→ この「古典古代の文化の復興」傾向こそ、14Cからの「ルネサンス」運動の源となる。

「ルネサンス」と音楽

- 古代ギリシャの知見から、「天体のハルモニア」としての音楽の価値に気づく（ピタゴラス／プラトン）
- 当時の大学での教育内容（12C頃）
→ 「自由七科」（三学四科, 自由学藝）

三学（文法・修辞学・論理学）、
四科（算術、幾何学、天文学、音楽）

- 「自由七科」が、現代の大学の「一般教養」の起源
→ liberal arts (リベラル・アーツ) 自由学藝

本当の「ルネサンス音楽」とは

したがって、一般的な音楽史における、パレストリーナらの宗教音楽としての、いわゆる「ルネサンス音楽」は、しかし、文化史での本来の「ルネサンス」の意味合いは持っていないと考えるべきであろう。それらは「ルネサンス期の音楽」というほどの意味である。

一方、文化史上での本来の「ルネサンス」の意味合いを持つ、中世の「ルネサンス音楽」とは、やはりムーシケー的側面と、ピタゴラス的側面での2つの面においてあらわれる。

つまり一つは、ムーシケー的側面のルネサンスとして誕生した「オペラ」(イタリア・フィレンツェ, 17C)。

もう一つ、ピタゴラス的側面では、中世にボエティウスが提唱した2つの「聞こえない音楽」。

- ムジカ・ムンダーナ (天体の調和としての、聞こえない思弁的音楽)
- ムジカ・フマーナ (人体や魂の調和としての、聞こえない思弁的音楽)

において、その性格が表れているといえる。

参考資料・自習のために

- ・金澤正剛 (2007) 『キリスト教と音楽:ヨーロッパ音楽の源流をたずねて』 音楽之友社
- ・金澤正剛 (1998) 『中世音楽の精神史:グレゴリオ聖歌からルネサンス音楽へ』 講談社選書メチエ
- ・ドナルド・H・ヴァン・イス (1981=1986) 『西洋音楽史:音楽様式の遺産』 船山信子ほか(訳) 新時代社
- ・岡田暁生 (2005) 『西洋音楽史』 中公新書
- ・皆川達夫 (1977) 『中世・ルネサンスの音楽』 講談社現代新書
- ・内藤正則 (2009) 『イスラムの怒り』 集英社新書
- ・伊東俊太郎 (2006) 『十二世紀ルネサンス』 講談社学術文庫
- ・村上陽一郎 (2004) 『やりなおし教養講座』 NTT出版
- ・「ミサ式次第(会衆用)」 (カトリック東京カテドラル関口教会 [東京目白] で入手可能な冊子)
- ・NHKスペシャル「文明の道 第6集 バグダッド 大いなる知恵の都」(NHK オンデマンド。映像。)
- ・亀井俊介 (2002) 『ニューヨーク』 岩波新書